寅日東鳴人死、南鳴財備、西鳴口舌凶、北鳴客人來、卯日東鳴事在、南鳴小吉、西鳴酒食、北鳴客來、辰日東鳴愁來、南鳴愁在、西鳴客來、北鳴愁在、巳日東鳴人死、南鳴愁在、午日東鳴金財得、北鳴愁在、未日東鳴人死、南鳴女愁事、西鳴客來、北鳴客來、申日東鳴酒食、南鳴大凶、西鳴吉、北鳴客來、酉日東鳴客來、南鳴凶、北鳴家事在、戌日東鳴客來、南鳴事在、西鳴金財得、北鳴客來、亥日東鳴得財、南鳴事在、西鳴大吉、北鳴人死、子日東鳴官口舌事、南鳴人死三十日、丑日鳴北方里邑人死、大神必有五日忌、

又云、子日官口舌事、丑日病寅日事、卯日馬牛死、辰日火失事、巳日財物得、申日子死大凶、酉日病事、戌日水流死、亥日同上、

〔大和本草十六獸〕狐略○中

其口氣ヲ吹ケバ火ノ如シ、狐火ト云、

狐火

〔一宵話〕稲荷の狐

狐火の事、古より種々ある事なり、或人少年の頃、山中にて目前に見し事あり、七月二十五日の曉、隣村へ行んとする時、途中三四町隔て、山の麓に炬火のちらめくを見付、扨は狐火也、いで試んと稲田の畷道を稲葉がくれに這ゆくに、狐はかゝる時人來べしとはさらで、大小二三十疋叢祠の廣前にて、逐つ逐はれつ、息を限りに戲れ居けり、遠くよりて見るに、火とみゆるものは、彼が息なりけり、ヒョウト飛上ル時、口中よりフット息吹出づ、其息火の如く、ヒウ〳〵と光る、大抵口より二三尺前にてひかる也、光りつゞけに光る事なし、勢にのりヒョッと飛び出す時のみちらつく、遠方より見れば、明滅斷續するも理りなり、やがて人聲聞えたれば、それに驚きハウ〳〵ちりちりに山の奥へにげ入ぬ、擊尾出火など、古書にいひしは、口と尻との違ひなりと笑ひしも、今は昔の茶のみ話になれりと語る、此は吹口氣如火といふによく合へり、

狐雜載

〔建内記〕嘉吉元年二月七日、向慶壽院奉謁海門和尚、辛酉事等言談、和尚云、於室町殿女房髪近來切之恠異事、爲何者之所爲哉不審之處、近頃見洛陽伽藍記之處、狐之所爲也、及百世人切之事有先例也、狐者拜北斗如此變化歟、所詮北斗歟、尊星王歟、何樣就星被修其法、有祈念者可然哉、其物之所爲ト已ニ覺知ル時ハ、其物不成變化事者也、天狗なども不可盡と云事あり、肝要は就其事修其法、禳